The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	銀雀山漢墓竹簡「奇正」篇の思想史的意義 : 兵家思想と道家思想
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2014, 59, p. 85-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　珠号（総五十九号）平成二十六年十二月　八五―一〇一頁

銀雀山漢墓竹簡「奇正」篇の思想史的意義

―兵家思想と道家思想―

椛島雅弘

序言

「兵家思想と道家思想」といってまず想起されるのが、『孫子』と『老子』の関係である。有為の極致である戦争を説く『孫子』と、無為自然を説く『老子』とは、一見対極にあるかのようで、実はいくつかの様々な点で類似していることは周知の通りである。例えば、『孫子』に「夫兵形象水。（夫れ兵の形は水に象る。）」（虚実篇）とある一方で、『老子』は「上善若水。水善利萬物而不爭、處衆人之所惡。故幾於道。（上善は水の若し。水は善く万物を利して争わざりて、衆人の悪む所に処る。故に道に幾し。）」（第八章）と述べており、共に水を尚んでいる。このような現象は、両者のみに見られる特殊な事例なのだろうか。

二〇一〇年に刊行された『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』には、「論政論兵之類」五十篇が収録されている。その内の一つに、「奇正」という篇が存在するが、小論ではこの篇を取り上げて、主に『淮南子』兵略訓との関係を明らかにし、また「奇正」「無形」「変化」といった観点から、兵家思想と道家思想の関係性を検討することにより、奇正篇の思想史的意義を明らかにしたい。

一、問題の所在

今回取り上げる奇正篇は、一九七五年時点の『孫臏兵

法』（銀雀山漢墓竹簡整理小組、文物出版社）では、『孫臏兵法』下篇と見なされていた。しかし、一九八五年の再版（『銀雀山漢墓竹簡［壹］』）では、「初版にあった下篇は孫臏の書いたものではなかった」との編集説明があり、新たに五教法篇を加え計十六篇を『孫臏兵法』として出版した。恐らく、下篇は『孫臏兵法』に入れるには根拠が不足していたと判断されたのであろう。このように、どの篇が『孫臏兵法』か、という問題について、一度見解が訂正され、その結果奇正篇は『孫臏兵法』から除外された。しかし、奇正篇を含めた十五篇は、一九八五年以降も変わらず『孫臏兵法』であると見なされ、研究がなされてきた。

そして、二〇一〇年に『銀雀山漢墓竹簡［貳］』が出版されることによって、この状況は新たな展開を迎える。第二輯は、「佚書叢残」として、「論政論兵之類」五十篇、「陰陽・時令・占候之類」十二篇、「其他」十三篇の大きく三部に分けて構成されている。ここで注目すべきは、かつて『孫臏兵法』とされ、のちに外された十五篇すべてが、「論政論兵之類」に組み込まれていることである。

また編集説明によれば、第三輯に収録される予定の編題木牘の残片に篇名が記載されており、その篇名は、この第二輯に収録された「論政論兵之類」の第一から第十二篇までに該当しているという。つまり、「論政論兵之類」第一から第十二篇までは、とりあえず、ひとまとまりの文献であったことが推測されるのである。そして、その中の「将敗」、「［将失］」、「兵之恒失」はかつて『孫臏兵法』の下篇であった文献である。よって、少なくともこの三篇は、『孫臏兵法』でないことが判明したのである(注1)。

奇正篇に関連する先行研究として、谷中信一「斉地兵法思想の漢代への影響―『淮南子』兵略訓を中心として―」（『日本女子大学紀要　文学部』第四十号、一九九一年）が挙げられる。谷中氏は、「奇正」と『淮南子』兵略訓との類似する箇所について言及すると共に、『淮南子』兵略訓が斉地の兵法思想を継承し述作されたことを指摘する。また、石井眞美子「『孫子』兵勢篇と「奇正」」（『学林』第三十五号、二〇〇二年）では、奇正篇と『淮南子』兵略訓の関連性に加え、『孫子』との関連性について指摘する。湯浅邦弘「先秦兵学の展開―『銀雀山漢墓竹簡［貳］』を手がかりとして―」（大阪大学出版会、『竹簡学―中国古代思想の探究―』、二〇一四年）でも、「奇正」が『孫子』の奇正観を基本としながらも、それを更に発展させたものであることを指摘する。

このように、奇正篇は『孫子』『淮南子』との関わりが注目されている。小論では、以上の先行研究を踏まえつつ、『孫子』『孫臏兵法』『淮南子』との関係を検討することによって、主に兵家思想と道家思想の関係という観点から、奇正篇の思想史的意義を明らかにしたい。なお、今後奇正篇という語とは別に「奇正」という語を用いるが、その際には概念を指す語として用い、奇正篇とは別の意味であることを断っておく(注2)。

二、奇正篇の思想と『孫子』『孫臏兵法』との関係

奇正篇は、軍事用語としての奇正について専論した篇である。奇正篇はまず、「天地之理、至則反、盈則敗。(天地の理は、至れば則ち反り、盈つれば則ち敗る。)」という語に始まり、続けて「四時」「五行」「万物」「万生」「形勢」の変化について述べる。そしてこれらを「有形の徒」と規定し、「戰者、以形相勝者也。(戦なる者は、形を以て相勝つ者なり。)」「形勝之変、與天地相敝而不窮。(形勝の変は、天地と相敝いて窮まらず。)」と、「形」「形勝の変」を重視する。

そして、「形」と奇正の関係を次のように解説する。

形以應形、正也。無形而制形、奇也。奇正無窮、分也。分之以奇數、制之以五行、鬭之以□□。分定則有形矣。形定則有名【矣。□□□】則用矣。同不足以相勝也。故以異爲奇。是以靜爲動奇、佚爲勞奇、飽爲飢奇、治爲亂奇、衆爲寡奇。發而爲正、其未發者奇也。奇發而不報、則勝矣。有餘奇者、過勝者也。

形以て形に応ずるは、正なり。無形にして形を制するは、奇なり。奇正窮まり無きは、分なり。之を分くるに奇数を以てし、之を制するに五行を以てし、之を鬭わすに□□を以てす。分、定まれば則ち形有り。形、定まれば則ち名有り。□□□則用矣。同は以て相勝つに足らざるなり。故に異を以て奇と為す。是を以て静は動の奇と為り、佚は労の奇と為り、飽は飢の奇と為り、治は乱の奇と為り、衆は寡の奇と為る。発して正と為り、其の未だ発せざる者は奇なり。奇の発して報ぜられざれば、則ち勝つ。奇に余り有る者は、勝ちに過ぐる者なり。

明確な形でもって形に対応するのが「正」であり、明確な形をとることがなく、形を制御することを「奇」とし、「奇正」が窮まりなく続く要因を「分」(軍の編成)

とする。

後半では、少々話題が変わり、民衆が法令に従う方法を「勢」と関連付けて解説する。

故戰勢、勝者益之、敗者代之、勞者息之、飢者食之。故民見□人而未見死、蹈白刃而不旋踵。故行水得其理、漂石折舟、用民得其性、則令行如流。

故に戦勢は、勝つ者には之を益し、敗るる者には之を代え、労する者には之を息わせ、飢うる者には之を食せしむ。故に民は□人を見て未だ死を見ず、白刃を蹈みて踵を旋さず。故に水を行りて其の理を得れば、石を漂わせ舟を折き、民を用いて其の性を得れば、則ち令の行わるることは流るるがごとし。

以上、奇正篇の内容について確認した。それでは、奇正篇の思想は『孫子』とどのような関係にあるだろうか。先行研究(注3)を参考にしながら検証したい。

三軍之衆、可使必受敵而無敗者、奇正是也。

三軍の衆、必ず敵を受けて敗なからしむるべきは、奇正是れなり。(『孫子』勢篇)

凡戰者、以正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江河、終而復始、日月是也。死而復生、四時是也。聲不過五、五聲之變、不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也。勢勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇正相生、如循環之無端、孰能窮之哉。

凡そ戦いは、正を以て合し、奇を以て勝つ。故に善く奇を出だす者は、窮まり無きこと天地のごとく、竭きざること江河のごとし。終わりて復た始まるは、日月是れなり。死して復た生ずるは、四時是れなり。声は五に過ぎざるも、五声の変は勝げて聴くべからざるなり。色は五に過ぎざるも、五色の変は勝げて観るべからざるなり。味は五に過ぎざるも、五味の変は勝げて嘗むべからざるなり。戦勢は奇正に過ぎざるも、奇正の変は勝げて窮むべからざるなり。奇正の相生ずることは、循環の端無きがごとし。孰か能く之を窮めんや。(同上)

「奇正」について論じている箇所を確認すると、その内容は基本的に奇正篇と類似することがわかる。また、奇正篇に頻出した「形」という概念も、『孫子』に見える。

故形人而我無形、則我專而敵分、我專爲一、敵分爲十、是以十攻其一也。

故に人を形せしめて我に形無ければ、則ち我は專まりて敵は分かる。我は專まりて一と為り、敵は分かれて十と為らば、是れ十を以て其の一を攻むるなり。(『孫子』虛実篇)

故形兵之極、至于無形。無形、則深間不能窺、智者不能謀。因形而措勝于衆、衆不能知、人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形。故其戰勝不復、而應形於無窮。

故に兵を形すの極は、無形に至る。無形なれば、則ち深間も窺うこと能わず、智者も謀ること能わず。形に因りて勝を錯くも、衆は知ること能わず。人皆我が勝つ所以の形を知るも、吾が勝を制する所以の形を知ること莫し。故に其の戦い勝つや復さずして、形に無窮に応ず。(同上)

虛実篇では、しばしば「無形」の重要性を説いているが(注4)、奇正篇においても、「無形」という語が見える。ただし、奇正篇は「形以て形に応ずるは、正なり。無形にして形を制するは、奇なり。」とあるように、「奇正」と「無形」を密接に関連付けて論じる点で『孫子』と相違点が見られる。もちろん、『孫子』で「奇正」と「無形」が同じく「窮まり無き」ものとされていることからわかるように、両概念は『孫子』においても近似性の高い概念であったことが予想される。奇正篇はこのように、『孫子』の軍事思想を受け継ぎながらも、単なる模倣に留まらず、さらに応用させたことが予想される(注5)。

それでは、『孫臏兵法』との関係性はどうであろうか。以前『孫臏兵法』に組み込まれたように、両者は特徴を多く共有するのか、もしくは全く別の特徴が見られるものなのか、両者の関係性を検討したい。まず両者を概観して目に付くのが、「勢」という語である。奇正篇で、「故戰勢、勝者益之、敗者代之、勞者息之、飢者食之。(故に戦勢は、勝つ者は之を益し、敗るる者は之を代え、労する者には之を息わせ、飢うる者には之を食らわしむ。)」とあり、また『孫臏兵法』でも「何以知弓弩之爲勢也。發於肩膺之間、殺人百歩之外、不識其所道至。故曰、弓弩勢也。(何を以て弓弩の勢為るを知るや。肩膺の間に発して、人を百歩の外に殺し、其の道りて至る所を識らず。故に曰く、弓弩は勢なりと。)」(勢備篇)とあるように、共通して「勢」の思想を読み取ることができる(注6)。

次に、基調とする立場（兵権謀か兵陰陽か）はどうだろうか。『孫臏兵法』では、一部兵陰陽的な要素を含む(注7)一方で、「間于天地之間、莫貴于人。（天地の間に間するは、人より貴きは莫し。）」（月戦篇）とあるように、基本的に人為を重視していることが読み取れる。また、「敵衆且武、必戰道乎。（敵多くして且つ武なるに、必ず戦うに道ありや。）」（威王問篇）という問いに、孫臏が「有。埤壘廣志、嚴正輯衆、避而驕之、引而勞之、攻其無備、出其不意、必以爲久。（有り、壘を埤くして志を広くし、正を厳しくして衆を輯め、避けて之を驕らせ、引きて之を労らせ、その無備を攻めてその不意に出で、必ず以て久を為す。）」と、権謀的思想を基調としていることがわかる。一方、奇正篇においても「之を制するに五行を以てす」とあり、一部兵陰陽的な記述を含む一方で、「奇の発して報ぜられざれば、則ち勝つ」と基本的に権謀を重視していることが読み取れる。

ただし、両者の間には相違点も存在する。奇正篇では「奇」と「正」の変化を主題として内容が抽象的であるが、一方『孫臏兵法』では変化について専論することはなく、具体的・実践的な軍事論が主に語られる。ただし、見威王篇では、「夫兵者、非士恒勢也。（夫れ兵は、恒勢に士（たの）むに非ざるなり。）」と、「勢」が一定不変のものではないことを述べる。また、変化と密接な関わりにある「詭道」が、『孫臏兵法』でもしばしば説かれている。さらに地葆篇では、「五壤之勝、青勝黄、黄勝黑、黑勝赤、赤勝白、白勝青。（五壤の勝は、青は黄に勝ち、黄は黒に勝ち、黒は赤に勝ち、赤は白に勝ち、白は青に勝つ。）」と、五行の流転について述べる。つまり、『孫臏兵法』が主に具体的・実践的な軍事論を述べる一方で、奇正篇は主に抽象的な軍事論を述べる点で異なっていた。

以上、奇正篇と『孫臏兵法』の関係性について検討した。その結果、両者は一部相違点は見られるものの、「勢」について説く点、及び兵権謀的な思想を基調としている点で共通していた(注8)。恐らく、奇正篇と『孫臏兵法』は、共に『孫子』を継承しながらも、それぞれ独自に『孫子』の軍事思想を発展させた文献であることが推測される。

それでは、奇正篇に遅れて成立したことが予想される『淮南子』とはどのような関係にあるだろうか。また、両者が密接な関係にあるとすれば、そのことには如何なる思想史的意義を有するのだろうか。

三、『淮南子』への接続

奇正篇と『淮南子』の関係性について検討する前に、両者の前後関係について検討したい。『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』によれば、竹簡が出土した銀雀山漢墓の年代は前漢の武帝初期であり、竹簡の筆写時期は文帝・景帝から武帝初期の頃だと推測されている。よって、これが銀雀山漢墓に含まれている竹簡の成立下限となる。ただし、文献が筆写されてから墓主の手に渡るまでには、相当の年月が経過していることが予想される。よって奇正篇は、遅くとも戦国後期までには成立していたことが推測される。

一方『淮南子』は、淮南王劉安（紀元前一七九年～紀元前一二二年）が学者を集めて編纂させた書であり、武帝初期に成立している。よって、恐らく奇正篇は『淮南子』に先行して成立した文献だと考えられる。また楠山春樹氏が、「要するに本篇の説く兵法は、実戦に即した兵法というよりも、道家や儒家の思想に修飾され、理念化された兵法である。それは百家を折衷する『淮南子』にふさわしい兵書であるともいえるし、或いは、すでに漢王朝の権威が確立して、いまさら実戦の駈引を説く必要もなくなった当世を反映する兵書であるともいえよう(注9)。」と解説するように、兵略訓の性質は奇正篇よりも理念的であることから、奇正篇と『淮南子』の時代背景が異なり、奇正篇が『淮南子』に先行する文献であることが窺える。

それでは、奇正篇と『淮南子』兵略訓の関係について検討したい。先行研究(注10)で既に指摘されている通り、両者には類似する記述が多く存在する。

i 奇正篇

天地の理は、至れば則ち反り、盈つれば則ち敗る、□□是なり。代興り代廃す、四時是なり。勝つ有り勝たざる有り、五行是なり。生有り死有り、万物是なり。能有り不能有り、万生是なり。余り有る所有り、足らざる所有り、形勢是なり。故に有形の徒は、名ずくべからざる莫く。有名の徒は、勝つべからざる莫し。故に聖人は万物の勝ちを以て万物に勝ち、故に其の勝ちは屈(きわま)らず。戦なる者は、形を以て相勝つ者なり(注11)。

『淮南子』兵略訓

凡そ物朕有り、唯だ道のみ朕無し。朕無き所以は、其の常の形勢無きを以てなり。輪転して窮まり無き

こと、日月の運行に象り、春秋の代謝有るがごとく、日月の昼夜有るがごとく、終わりて複た始まり、明かにして複た晦く、能く其の紀を得る莫し。刑を制して刑無きが、故に功成るべし。物を物として物とせられざるが、故に勝ちて屈せず。兵に刑するの極たるや、刑無きに至りて、之を極むと謂うべし(注12)。

ここでは、両者共通して「形勢」という単語が見られ、また「四時」「五行」(奇正篇)「日月」(兵略訓)の変化について言及する。ただし、奇正篇で窮まりのない様子を「天地の理」としているのに対し、兵略訓では「道」としており、道家的要素を見いだすことができる。

ii 奇正篇

形は以て勝つべからざる莫きも、而も其の勝つ所以の形を知ること莫し。形勝の変は、天地と相敝いて窮まらず。形勝は、楚越の竹書を以て之を書すとも足らず。形なる者は、皆其の勝ちを以て勝つ者なり。一形の勝ちを以て万形に勝つは、不可なり。形を制する所以は壱なるも、勝つ所以は壱にすべからざるなり。故に善く戦う者は、敵の長ずる所を見れば、則ち其の短なる所を知り、敵の足らざる所を見れば、則ち其の余り有る所を知る。勝ちを見ること日月を見るがごとし。其の勝ちを錯くや、水を以て火に勝つがごとし(注13)。

『淮南子』兵略訓

夫れ形埒有る者は、天下之を訟見し、篇籍有る者は、世人之を伝え学ぶ。此れ皆形を以て相勝つ者なり。善く形する者は法あらざるなり、道を貴ぶ所は、其の形無きを貴ぶなり。形無ければ則ち制迫すべからざるなり。度量すべからざるなり。巧詐すべからざるなり。規慮すべからざるなり。智見るる者は、人之が謀を為し、形見るる者は、人之が功を為す。衆見るる者は、人之が伏を為し、器見るる者は、人之が備を為す。動作周還、倨句詘伸、巧詐すべき者は、皆善くする者に非ざるなり。善くする者の動くや、神出にして鬼行、星の耀きて玄の逐い、進退詘伸には、朕塑を見ず、鸞挙麟振、鳳飛龍騰、発すること秋風のごとく、疾きこと駭龍のごとし。当に生を以て死を撃ち、盛を以て衰に乗じ、疾を以て遅を掩い、飽を以て飢を制し、水を以て火を滅するがごとく、湯を以て雪に沃ぐはごとく、何くに往くとして遂げざらん(注14)。

ここでは、両者「形」の窮まりのない様子について述べる。奇正篇の「形勝の変は、天地と相敵いて窮まらず」は、iで確認した「輪転して窮まり無きこと、日月の運行に象り……」（兵略訓）と類似する。ただし、「道を貴ぶ所は、其の形無きを貴ぶなり」とあるように、兵略訓では「形」と「道」を密接に関連づけており、ここでも道家的要素を読み取ることができる。

ⅲ奇正篇

同は以て相勝つに足らざるなり。故に異を以て奇と為す。是を以て静は動の奇と為り、佚は労の奇と為り、飽は飢の奇と為り、治は乱の奇と為り、衆は寡の奇と為る。発して正と為り、其の未だ発せざる者は奇なり。奇の発して報ぜられざれば、則ち勝つ。奇に余り有る者は、勝ちに過ぐる者なり（注15）。

『淮南子』兵略訓

同は以て相治むるに足ること莫し。故に異を以て奇を為す。両爵相与に鬬うも、未だ死する者有るなり。鸇鷹至れば、則ち之が為に解き、其の類にするを以てなり。故に静は躁の奇と為り、治は乱の奇と為り、飽は飢の奇と為り、佚は労の奇と為る。奇正の相応ずること、水火金木の代雌雄と為るがごときなり（注16）。

ここでは、両者「奇」について言及し、「飽は飢の奇と為り、治は乱の奇と為り……」（奇正篇）「静は躁の奇と為り、治は乱の奇と為り……」（兵略訓）と同様の論法で解説する。ただし、「其の未だ発せざる者は奇なり。奇の発して報ぜられざれば、則ち勝つ」とあるように、奇正篇では、より実戦で勝利することを目的として「奇」の概念を用いていることがわかる。（また、同様の傾向はⅰ、ⅱにも共通して見える。）

以上、奇正篇と兵略訓において類似する箇所を確認した。その結果、「奇正」「（無）形」「変化」といった思想を共通して確認することができた。しかしその一方で、奇正篇ではより勝利を目的として論を展開し、兵略訓はさほど実戦での勝利を目的とすることがなく、道家思想を基調として論を展開するといった相違点が見られた。

では、このことを思想史的に解釈しようとすれば、如何なる意義を見いだすことができるだろうか。戦国時代に戦争に勝利することを目的として著された奇正篇の思想（もしくは奇正篇のような思想）は、漢代に入り、『淮南子』兵略訓に道家的解釈を交えて取り入れられた。よって奇正篇は、兵家思想の漢代思想への接続という点

で思想史的意義を有すると捉えることができる。また、兵家思想と道家思想という観点から見れば、「奇正」等の思想を介した両者の接近を確認することができ、奇正篇は、その点においても思想史的意義があることが推測される。

それでは、なぜ奇正篇の思想（もしくは奇正篇のような思想）は、その多くが『淮南子』に取り入れられたのだろうか。

四、道家思想と「奇正」「無形」「変化」

その原因を探るため、道家思想に見える「奇正」「無形」「変化」について検討したい。まずは、『老子』について。

以正治國、以奇用兵、以無事取天下。
正を以て国を収め、奇を以て兵を用い、無事を以て天下を取る。（第五十七章）

正復爲奇、善復爲妖。禍兮福之所倚、福兮禍之所伏。孰知其極。其無正。
正は復た奇と為り、善は復た妖と為る。禍は福の倚る所、福は禍の伏す所なり。孰れか其の極を知らん。其れ正無し。（第五十八章）

天下莫柔弱於水、而攻堅強者莫之能勝、以其無以易之。
天下水より柔弱なるは莫し、而も堅強を攻むる者、之に能く勝る莫し、以て其の之を易うるを以てするなり。（第七十八章）

第五十七章では、国を治める際には、「正」道を用い、兵を用いる際に「奇」策を用いることを述べる。第五十八章では、「奇正」及び「善妖」「禍福」の変化に窮まりがないことを述べる。また第七十八章では、柔弱な水が堅強を攻めるのを「之に能く勝る莫し」と述べるが、これは、「水」が自在にその形を変えて「無形」であるという性質を有することを念頭に置いた発言だと思われる。同様の思想は

夫兵形象水。水之形、避高而趨下。兵之形、避實而擊虛。水因地而制流、兵因敵而制勝。故兵無常勢、水無常形。能因敵變化而取勝、謂之神。
夫れ兵の形は水に象る。水の形は、高きを避けて下に趨く。兵の形は、実を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流れを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に

兵に常勢無く、水に常形無し。能く敵に因りて変化して勝を取る、之神と謂う。（『孫子』虚実篇）

と、『孫子』にも存在し、類似性を見いだすことができる(注17)。また、第五十七章の文章は『文子』に引用されている。

老子曰、以政治國、以奇用兵。先爲不可勝之政、而後求勝於敵、以未治而攻人之亂、是猶以火應火、以水應水也。同莫足以相治。故以異爲奇、靜爲躁奇、治爲亂奇、飽爲飢奇、逸爲勞奇、正之相應、若水火金木之相伐也。

老子曰く、政を以て国を治め、奇を以て兵を用う。先づ勝つべからざるの政を為し、而る後に敵に勝つを求め、未だ治めざるを以て人の乱を攻む、是れ猶火を以て火に応じ、水を以て水に応ずるがごときなり。同は以て相治むるに足ること莫し。故に異を以て奇と為し、静は躁の奇と為り、治は乱の奇と為り、飽は飢の奇と為り、逸は労の奇と為り、正の相応ずること、水火金木の相伐つがごときなり。（上礼篇）

ここでは、「奇正」と軍事を密接に関連付けており、文章も奇正篇・『淮南子』兵略訓と一部類似する。

次に『列子』について。『列子』では「奇正」が主題となることはないが、「無形」「変化」についてはしばしば言及する。

其言曰、有生不生、有化不化。不生者能生生、不化者能化化。生者不能不生、化者不能不化、故常生常化。常生常化者、無時不生、無時不化。陰陽爾、四時爾。不生者疑獨、不化者往復。往復、其際不可終。疑獨、其道不可窮。

其れ言に曰く、生ずるもの、生ぜざるもの有り、化するもの化せざるもの有り。生ぜざる者は能く生生し、化せざる者は能く化化す。生ずる者は生ぜざる能わず、化する者は化せざる能わず、故に常に生じ常に化す。常に生じ常に化する者は、時として生ぜざる無く、時として化せざる無し。陰陽のみ、四時のみ。生ぜざる者は疑独し、化せざる者は往復す。往復すれば、其の際終るべからず。疑独すれば、其の道窮むべからず。（天瑞篇）

ここでは、「生」「不生」「化」「不化」「陰陽」「四時」

といった「変化」について述べ、「其の道窮む」ために「疑独」（変化の外にいて独立した立場を守る）することを重視する。また、天瑞篇には「無形」に関する記述も見える。

昔者聖人、因陰陽以統天地。夫有形者生於無形。昔者聖人、陰陽に因りて以て天地を統ぶ。夫れ有形の者は無形に生ず。（同上）

生之所生者死矣、而生生者未嘗終。……味之所味者嘗矣、而味味者未嘗呈、皆無爲之識也。生の生ある所の者は死す、而るに生を生あらしむる者は未だ嘗て終らず。……味の味ある所の者は嘗めらる、而るに味を味あらしむる者は未だ嘗て呈はれず、皆無之が識（しゅ）為ればなり。（同上）

「有形の者は無形に生ず」や「皆無之が識（しゅ）為ればなり」とあるように、「無」「無形」が万物の主宰的な役割を果たしていることを述べる。

「変化」については、周穆王篇でも述べられる。

造化之所始、陰陽之所變者、謂之生、謂之死。窮數達變、因形移易者、謂之化、謂之幻。造物者其巧妙、其功深、固難窮難終。因形者其巧顯、其功淺、故隨起隨滅。造化の始まる所、陰陽の変ずる所の者、之を生と謂い、之を死と謂う。数を窮め変に達し、形に因りて移易する者、之を化と謂い、之を幻と謂う。造物者は其の巧妙にして、其の功深し、固より窮め難く終え難し。形に因る者は其の巧顕かにして、其の功浅く、故に隨いて起こり隨いて滅ぶ。（周穆王篇）

「造化」が起こって「陰陽」が変化していくことを「生」あるいは「死」と称し、次々と変化していくものを「化」「幻」と称する。ここからも、「変化」の思想を読み取ることが可能である(注18)。

次に「黄帝四経」について。「黄帝四経」は、馬王堆漢墓帛書に含まれる文献であり、前漢初期に流行した黄老思想を窺うことのできる文献である。黄老思想は、『老子』『列子』等の道家思想とは異なるものであるが、大きく見れば道家思想の一つと見なすことができるため、ここで取り上げて検討したい。まず「黄帝四経」の「奇正」について。

變恆過度、以奇相御。正奇有位、而名〔形〕弗去。

恒を変え度を過ぐれば、奇を以て相御す。正と奇に位有らば、而ち名〔形〕は去(はな)れず。(『経法』道法篇)

彼必正人也、乃能操正以正奇、握一以知多、除民之所害、而持民之所宜。

彼必ず正人ならば、乃ち能く正を操り以て以て奇を正し、一を握りて以て多を知り、民の害とする所を除きて、民の宜しとする所を持す。(『十六経』成法篇)

名正者治、名奇者亂。正名不奇、奇名不立。正道不殆、可後可始。乃可小夫、乃可國家。

名正しき者は治まり、名奇なる者は乱る。正名は奇ならず、奇名は立たず。正道殆からざれば、後に可(よろ)しく始めに可し。乃ち小夫に可しく、乃ち国家に可し。(『十六経』前道篇)

奇從奇、正從正。奇與正、恆不同廷。

奇は奇に従い、正は正に従う。奇と正とは、恒に廷を同じくせず。(『称』)

埤而正者增、高而倚者崩。

埤くして正しき者は増し、高くして倚る者は崩る。(同上)

得事之要、操正以正畸。

事の要を得れば、正を操り以て畸を正す。(『道原』)

「正と奇に位有らば、而ち名〔形〕は去(はな)れず。」(『経法』道法篇)「奇は奇に従い、正は正に従う。」(『称』)と、一部「正」「奇」を同等に扱う記述が見えるが、それ以外は、「事の要を得れば、正を操り以て畸を正す。」(『道原』)「高くして倚る者は崩る。」(『称』)とあり、「奇(畸、倚)」が「正」の下位概念として見なされ、「正」が貴ばれていることがわかる。「黄帝四経」において「正」が貴ばれていることは、以下の記述からも窺うことができる。

順者、動也。正者、事之根也。

順は、動なり。正は、事の根なり。(『経法』四度篇)

天貴正、過正曰詭。

天は正を貴び、正を過ぐるは詭と曰う。(『称』)

「正」を「事の根」であったり、「天」が貴ぶものであるとする。このように、「黄帝四経」では「正」が貴ばれ、「奇」は「正」より下位に位置づけられており、『老子』とは異なった奇正観が見られた。しかし、「黄帝四経」には「奇正」が使用されていることが確認された。

次に「変化」について。

周遷動作、天爲之稽。天道不遠、入與處、出與反。

周遷動作は、天之が稽（のり）を為す。天道遠からず、入りて与に処り、出でて与に反る。（『経法』四度篇）

極而反、盛而衰、天地之道也、人之理也。

極まれば而ち反り、盛んなれば而ち衰うるは、天地の道なり、人の理なり。（同上）

四時有度、天地之理也。日月星辰有數、天地之紀也。三時成功、一時刑殺、天地之道也。四時時而定、不爽不忒、常有法式、天地之理也。一立一廢、一生一殺。四時代正、終而復始。

四時度有るは、天地の理なり。日月星辰数有るは、天地の紀なり。三時功を成し、一時刑殺するは、天地の道なり。四時時ありて定まり、爽（たが）わず忒（そむ）かず、常に法式有るは、天地の理なり。一ときは立て一ときは廃し、一ときは生じ一ときは殺す。四時の代わること正しく、終われば而ち復た始まる。（『経法』論約篇）

天稽環周、人反爲之客。靜作得時、天地興之。

天稽は環周して、人反りて之が客と為る。静作時を得れば、天地之に興す。（『十六経』姓争篇）

凡變之道、非益而損、非進而退。首變者凶。

凡そ変の道は、益するに非すして損し、進むに非すして退く。変を首（はじ）むる者は凶なり。（『称』）

「入りて与に処り、出でて与に反る」（『経法』四度篇）、「天稽は環周して、人反りて之が客と為る」（『十六経』姓争篇）と「変化」について述べるが、「周遷動作は、天之が稽（のり）を為す」（『経法』四度篇）とあるように、「変化」の根底に「天」が存在することを意識している。また、「変を首（はじ）むる者は凶なり」（『称』）とあるように、「変化」を否定的に捉える記述も存在する。しかし、「黄帝四経」にも「変化」の思想を確認することができた。

以上、道家思想に見える「奇正」「無形」「変化」の思想について確認した。もちろん道家思想は「夫兵者、不祥之器。（夫れ兵は、不祥の器なり。）」（『老子』第三十一章）(注19)「作争者凶。（争いを作す者は凶。）」（『十六経』姓争篇）とあるように、基本的には積極的に軍事を肯定したり、戦略・戦術を述べる思想ではない(注20)。しかし『孫子』、奇正篇といった兵家系文献に用いられる「奇正」という単語や「無形」「変化」の思想は、『淮南子』以外の道家系文献にも見られた。よって、『淮南子』兵略訓が奇正篇のような思想を多く取り入れたのは、単な

る偶然ではなかったことが予想される。換言すれば、兵家思想と道家思想は少なくとも「奇正」「無形」「変化」という点においては、親和性が高かったことが予想される。そして、「奇正」「無形」「変化」を述べる奇正篇の思想が『淮南子』兵略訓に継承された原因も、この親和性の高さに求めることが可能であろう。

結語

以上、奇正篇の思想史的意義について考察した。奇正篇は、『孫子』から『淮南子』兵略訓までの兵学思想における経過を知ることができるという意義だけにとどまらず、道家思想との関わりについて示唆を与えるという点で貴重な資料であるといえる。後者を換言すれば、奇正篇と『淮南子』兵略訓の密接な関係は、「奇正」「無形」「変化」という観念を介した兵家思想と道家思想の接近という点で、思想史的意義を持つといえる。『漢書』芸文志兵書略・兵権謀家の説明に「權謀者、以正守國、以奇用兵。（権謀は、正を以て国を守り、奇を以て兵を用う。）」と『老子』の「奇正」に関する記述を引用することも、兵家思想と道家思想が「奇正」等の思想を介して接近しうることを傍証している。奇正篇の持つ思想史的意義はこれらの二点にあることが推察される。

また、道家思想を基調とする『淮南子』に、奇正篇のような思想が多く取り込まれたことは、他の道家系文献において、「奇正」「無形」「変化」の思想がしばしば見られたように、単なる偶然ではなかったことが予想される。「奇正」「無形」「変化」の思想は、兵家思想と道家思想が交わる十字路の一つであった(注21)。

注

(1)「論政論兵之類」に関する先行研究は以下の通りである。金城未来「銀雀山漢墓竹簡「兵之恒失」考釈」（『待兼山論叢』哲学篇第四十四号、二〇一〇年）、同上「銀雀山漢墓竹簡「五議」について」（『待兼山論叢』哲学篇第四十五号、二〇一一年）、草野友子「銀雀山漢簡『為国之過』の全体構成とその特質」（『京都産業大学論集』人文科学系列第四十三号、二〇一一年）、湯浅邦弘「銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」について」（『中国研究集刊』第五十二号、二〇一一年二月）、同上「興軍の時―銀雀山漢墓竹簡「起師」について―」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第五十二巻、二〇一二年）

(2) 今後「奇正」を引用する際には、『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』（銀雀山漢墓竹簡整理小組編、文物出版社、二〇一〇年）を底本

とし、また解釈に関しては、『孫臏兵法』（金谷治、東方書店、一九七六年）、『孫臏兵法校理』（張震沢、中華書局、一九八四年）等、先行する諸注釈書を参考にした。なお、底本とする二〇一〇年版の釈文は、一九七五年版と比べ一箇所だけ変更が見られる。（第一一八五簡上部が、「【矣】……」（一九七五年版）→「【矣、□□□】則用矣。」（二〇一〇年版）へ変更。）

（3）前掲石井論文。

（4）その他、「無形」を説く記述として、「故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻。微乎微乎、至于無形。神乎神乎、至于無聲。故能爲敵之司命。（故に善く攻むる者には、敵、其の守る所を知らず。善く守る者には、敵、其の攻むる所を知らず。微なるかな微なるかな、無形に至る。神なるかな神なるかな、無声に至る。故に能く敵の司命を為す。）」が挙げられる。

（5）なお、奇正篇と『孫子』の前後関係についてであるが、「奇正」という概念を軍事用語としてはじめて用いたのは『孫子』であるため、奇正篇が『孫子』よりも先行して成立したとは考えづらい。よって小論では、奇正篇は『孫子』より後に成立した文献であると見なして論を進めていく。

（6）また、『孫子』にも、「激水之疾、至于漂石者、勢也。（激水の疾くして、石を漂すに至る者は、勢なり。）」（勢篇）「故善戰者、求之于勢、不責于人。（故に善く戦う者は、之を勢に求めて、人に責めず。）」（同上）とあり、「勢」を重視している。

（7）例えば、「五壤之勝、青勝黄、黄勝黑、黑勝赤、赤勝白、白勝青。（五壤の勝ちとは、青は黄に勝ち、黄は黒に勝ち、黒は赤に勝ち、赤は白に勝ち、白は青に勝つ。）」（地葆篇）が挙げられる。

（8）また、『孫臏兵法』では「奇正」のように、直接「正」「奇」という語を用いることはないが、先述の通り、奇正に類似する概念が散見する。例えば、「奇正」において重視された概念の一つである「変化」が、「黄帝作劍、以陣象之。羿作弓弩、以勢象之。禹作舟車、以變象之。湯・武作長兵、以權象之。凡此四者、兵之用也。（黄帝は剣を作り、陣を以て之に象る。羿は弓弩を作り、勢を以て之に象る。禹は舟車を作り、変を以て之に象る。湯・武は長兵を作り、権を以て之に象る。凡そ此の四者は、兵の用なり。）（勢備篇）のように述べられている。

（9）新釈漢文大系『淮南子』（明治書院、一九八八年）八一五頁。

（10）前掲谷中論文。

（11）天地之理、至則反、盈則敗、□□是也。代興代廢、四時是也。有勝有不勝、五行是也。有生有死、萬物是也。有能有不能、萬生是也。有所有餘、有所不足、形勢是也。故有形之徒、莫不可名。有名之徒、莫不可勝。故聖人以萬物之勝勝萬物、故其勝不屈。戰者、以形相勝者也。

（12）凡物有朕、唯道無朕。所以無朕者、以其無常形勢也。輪轉而無窮、象日月之運行、若春秋有代謝、若日月有晝夜、終而

複始、明而複晦、莫能得其紀。制刑而無刑、故功可成。物物而不物、故勝而不屈。刑兵之極也、至於無刑、可謂極之矣。

(13) 形莫不可以勝、而莫知其所以勝之形。形勝之變、與天地相敝而不窮。形勝、以楚越之竹書之而不足。形者、皆以其勝勝者也。以一形之勝勝萬形、不可。所以制形壹也、所以勝不可壹也。故善戰者、見敵之所長、則知其所短、見敵之所不足、則知其所有餘。見勝如見日月。其錯勝也、如以水勝火。

(14) 夫有形埒者、天下訟見之、有篇籍者、世人傳學之。此皆以形相勝者也。善形者弗法也、所貴道者、貴其無形也。無形則不可制迫也。不可度量也。不可巧詐也。不可規慮也。智見者、人爲之謀。形見者、人爲之功。衆見者、人爲之伏。器見者、人爲之備。動作周還、倨句詘伸、可巧詐者、皆非善者也。善者之動也、神出而鬼行、星耀而玄逐、進退詘伸、不見朕埜、鸞擧麟振、鳳飛龍騰、發如秋風、疾如駭龍。當以生擊死、以盛乘衰、以疾掩遲、以飽制飢、若以水滅火、若以湯沃雪、何往而不遂。

(15) 同不足以相勝也。故以異爲奇。是以靜爲動奇、佚爲勞奇、飽爲飢奇、治爲亂奇、衆爲寡奇。發而爲正、其未發者奇也。奇發而不報、則勝矣。有餘奇者、過勝者也。

(16) 同莫足以相治也。故以異爲奇。兩爵相與鬪、未有死者也。鷙鷹至、則爲之解、以其異類也。故靜爲躁奇、治爲亂奇、飽爲飢奇、佚爲勞奇。奇正之相應、若水火金木之代爲雌雄也。

(17) ただし、竹簡本『孫子』では、「水無常形」ではなく「無常形」となっており、「水」の字が無いことには、注意を要する。

(18) なお、『荘子』には「奇正」「無形」「変化」について述べることは殆どない。これは、『荘子』で「万物斉同」が中心的思想として存在しているため、「奇正」「無形」「変化」について積極的に述べる、もしくは貴ぶ必然性に乏しいことが原因だと考えられる。ただし「万物斉同」は、「奇」と「正」、「形」と「無形」、また「変化」したあらゆるものを相対的に価値づけるといった理論であるため、全く無関係でないことが考えられる。

(19) 伝世本は、「夫佳兵者」に作るが、馬王堆帛書本に従って改めた。

(20) ただし、「黄帝四経」では、「聖人不達刑、不襦傳、因天時、與之皆斷。(聖人は刑を達(ほしいまま)にせず、襦伝せず、天時に因り、之を与に皆断ず。)」(『十六経』成法篇)とあり、天道に沿った義兵説を窺うことができる。また、張家山二四七号墓から出土した『蓋廬』第八章にも、天の代わりに誅伐を行うという思想が見られ、類似していることがわかる。『蓋廬』の義兵説については、福田一也「張家山漢簡『蓋廬』にみえる義兵説」(『中国研究集刊』第四十七号、二〇〇八年)に詳しい。

(21) なお、唐代に著された王真『道徳経論兵要義述』も、兵家思想と道家思想との関係を検討する上で重要となることが予想される。